様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　６ 月 ２７ 日現在

機関番号：４４３０６
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2020
課題番号：１７Ｋ０２９１８

研究課題名（和文）スローラーナーを支援する英語指導法と教材の開発―ユニバーサルデザインを目指して

研究課題名（英文）Development of English Teaching Methods and Materials to Support Slow Learners: Toward Universal Design

研究代表者
安木　真一（Yasugi, Shinichi）

京都外国語短期大学・キャリア英語科・教授

研究者番号：７０６３７９９１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的はスローラーナーを支援するための実践的英語指導法を確立させ、教材を開発し、公開講座等の場を設けることで中高の現場にそれらを発信することである。そのために英語学習の各段階において生徒がどのようにしてつまずくかを様々な角度から分析し、そのつまずきを克服する方法を高等学校教員の協力を得て検討し、実践研究をしていただいた。つまずきをいくつかの段階に分けそのつまずきを克服するための指導法を開発し、振り返りを行った。実践と研究の成果は、最終発表会と社会貢献講演会で発表し中学、高等学校の現場に発信した。更に研究内容を収録したDVDを作成した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の意義は従来の研究にはない視点による研究を行なった点にある。第１に研究成果としてスローラーナーのつまずきを各段階に分け、段階毎の指導法を提示した。第２に研究者と高等学校の現場の実践者が長期間にわたり、定期的に議論し、授業改善や指導法の開発を行い、問題点を振り返り、分析しながら発展させてきた。研究者と実践者が手をアクション・リサーチを行なうという研究スタイルを確立した。第３にスローラーナーの定義を「初期段階からつまずいている学習者も視野に入れるが、様々な学力レベルの高校で、集団の中で英語学習につまずいている生徒を想定」とし、どの集団にもスローラーナーはいるという視点を提供した。

研究成果の概要（英文）：The goal of this research is to establish a practical English teaching method and develop teaching materials to support slow learners. The results are disseminated to junior and senior high school teachers through public lectures and other opportunities. To achieve this goal, how students stumble at each stage of English learning was analyzed from various angles, and ways to overcome these stumbling blocks were studied and put into practice with the cooperation of high school teachers. The stumbling blocks were divided into several stages, and teaching methods to overcome the stumbling blocks were developed and reviewed. The results of the practice and research were presented at the final presentation and the social contribution meeting. In addition, a DVD containing the contents of the research was produced. To sum up, the goal of this research was achieved.

研究分野：英語教育学

キーワード：スローラーナー　つまずき　文法　単語の音韻化　動機付け　スピーキング　指導法　ICT

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

高等学校では新学習指導要領に基づき「英語の授業を英語で教える」指導が始まっており、中学校でも実施が予定されている。しかし現状では中学生の 43.9%、高校生の 53.8%が、英語が苦手またはやや苦手と回答しており（ベネッセ教育総合研究所　2014)、英語教育改革の中で英語が苦手な生徒の数が減っているとは言い難い。また同調査によると新学習指導要領の元で指導を受けてきた 2014 年度の高校１年生の中で英語の嫌いな生徒の 23.3%が中学１年生前半または中学入学以前に英語が苦手になっており、英語学習の初期から英語に苦手意識を持っていることがわかる。つまずきの原因と指導法に関する先行研究はいくつか挙げられるが、英語教育学と特別支援教育などの他の領域から多角的視点から見た研究は見られなかった。本研究においては、生徒のつまずきを、発音や文字認識、文法と語彙の面を中心にして、英語教育学の先行研究と実証データに加え、特別支援教育の側面からも分析し、指導法や教材を提示することを目標とした。

２．研究の目的

本研究で明らかにされるのは現場の教師が使用できる「スローラーナーを指導する方法」である。同時に「スローラーナーのための教材」開発も行う。スローラーナーのための指導法や教材はユニバーサルデザインの指導法と教材であると考えられる。つまりスローラーナーを対象とすることですべての生徒に理解、習得が可能な理解しやすい指導法、学習法になるということである。

３．研究の方法

文法の弱点と指導法に関しては、安木（2016）では中学生用教科書の基本文の整序において学生の出来不出来を弁別する文法項目は、後置修飾、ネクサス、基本形の変形であることがわかった。これに金谷（2015）の句の把握が生徒の困難点であることを加味して考察すると、スローラーナーが「句の把握を核にしながら後置修飾やネクサスなどの句と句の間の意味関係を明らかにすることができる」方法を開発する必要があることがわかる。本研究はこの研究を更に深めスローラーナーの文法上のつまずきについて分析すると同時にそれを克服する指導法を、分析的指導法と音読などの練習型の指導法を組み合わせる形式で提示する。

スローラーナーの語彙の弱点と指導に関してはまずディスレクシアの問題について指導法を検討する。特にスペリングが読めない生徒のために音声と文字を一致させる指導法について先行研究を元に検証する。手島（2004）にあるフォニックスを授業に応用する方法、村上（2015）にある特別支援教育の観点からスローラーナーを支援する方法を４０人程度の生徒がいる中高の教室で活用する方法を提示し、高学年において単語の暗記に苦慮している生徒が再度英語をやり直しする方法について、安木（2014）を発展させ提起する。この際も文法指導の場合と同様に、分析的指導方法と音読などの訓練的指導法を組み合わせることで指導する。

尚、文法や語彙の指導と共に１年目のつまずきに関する先行研究により、更にいくつかにつまずきを分類しその克服方法の方向性を示す。動機付けに関するつまずきに関しては、スピーキング活動を授業の中に様々な形で入れることで生徒を動機付けする方法や、マルチメディアの効果的な利用方法を探究する。その他いくつかのつまずきの例を後述するが、個々のつまずきのみならず、つまずきに配慮したユニバーサルデザインの英語授業の開発を試みる。

4. 研究成果

(1) つまずきの分類

研究１年目のつまずきに関する先行研究の調査により学習者、特に高校生のつまずきを「文法の難しさ（特に語順と句の把握）に起因するつまずき」「単語の音韻化に関するつまずき（音読の躓きを含む)」「動機付けに関するつまずき」「４技能統合型指導でのつまずき」の４つに分類した

(2) 研究協力者の分担

上記の枠組みの中で研究協力者６名と安木がそれぞれの指導法を実践した。分類された項目に関して、以下のように分担を行った（敬称略)。「文法の難しさ（特に語順と句の把握）に起因するつまずき」を、近藤、渡部、安木が担当。「単語の音韻化に関するつまずき（音読のつまずきを含む)」を、梶谷　安木が担当。「動機付けに関するつまずき」は岩崎、近藤、松田、村木、渡部、安木が「スピーキング活動」を、渡部、近藤、岩崎、松田、村木、渡部、安木が「マルチメディア使用」を担当。松田、近藤が「技能統合指導に関するつまずき」を担当した。

(3) 担当者毎のテーマ

以下に各自のテーマと実践研究の内容をあげる。2019 年１月の中間発表会、2020 年１月の最終発表会、2021 年１月の社会貢献講演会で若干のテーマ名に差があり内容は発展しているが、大多数の実践は同じテーマである。2020 年の最終発表会のテーマ名を基本にして研究、実践内容を報告し、2021 年に変更のあったものに関しては続けて述べる。2020 年１月発表の詳細は安木編著 DVD(2020)にある。最初に安木が本研究において開発されたつまずき指導の基礎基本を述べ、以下研究協力者各自の実践研究の報告をする。

研究代表者: 安木真一

[実践研究 1] 文法指導上のつまずきにどのように対処するか？

安木(2015)、金谷(2019)等の先行研究から高校生の英語の文法上のつまずきを考察しそれを克服するための指導法について提示した。文法上のつまずきを、「句の理解に関するつまずき」

「意味順に関するつまずき」「学習した事項が使えるようにならないことに関するつまずき」の３つに分けつまずきを克服するための指導法を提示した。以下指導法別に記述する。

①SV 練習

つまずく生徒が主語(主部)と動詞を意識して読むことができるための手法を提示した。まず受動的スキルとして読む際に SV を常に意識させるために記号付けした英文を提示し、次に SV を見つける練習を行う。動詞に関しては定義づけを行い、すべての時制の一覧表での練習を同時に行う。

②意味順とチャンクの練習

田地野(2011)を参考にして句の理解と意味順の定着を図るために文章を意味順の表に入れて行く方法を提示した。

③英語を書き話すためのトレーニングの手法

SVO、SVC の文は英文の基本なのでいずれかを使って既習のチャンクを広げる練習を行う手法を提示した。

④文法からコミュニケーションへのトレーニング

チャンクの練習から教室内でのコミュニケーション活動へとつなげる手法を提示した。

⑤音読劇

学習した文法事項を使用して音読劇を行う手法を提示した。

[実践研究 2] 文字と音声の一致のつまずきに関してどのように対処するか？

文字と音声のつまずきに関して第２言語習得に加えて特別支援教育の知見を参考にしながらつまずきのレベル別に指導法を提案した。レベルは音素レベル、語彙、チャンク、文・文章のレベルに分けて分類し、以下９つの指導法を提示した

①英語発音のための息の練習②音素の練習　③２文字の音素を組み合わせて発音する練習
④３文字の語の発音練習　⑤子音の練習　⑥プロソディーの指導
⑦文レベルの音読練習　⑧発音評価　⑨リズム練習

提示した指導法は音素から範囲を広げて練習していくことで指導がなされるので、つまずきのレベル別に指導を提示し、実施することが可能である。中高生には教科書の本文指導の中で年間計画を立て、音声の指導を徐々に行う。特に音声練習をしたら生徒の発音を聞いて評価・指導する場を持つ⑧が重要である。

[実践研究 3] 音読を表現活動につなげることができないつまずきにどのように対処するか？

音読を表現活動につなげる問題を克服するための方法を以下の順番で提示した。まず表現活動を５つのタイプに分類し、表現活動を行う前の音読指導の問題点と留意点を明らかにし音読指導からスピーキングへ至る道筋の実際を述べた。従来のモデルと異なり同じ活動を繰り返しながらスパイラル状にアウトプットへとつながる９STEP モデルを提示した。

モデルを元になされた安木の所属校での実践研究の例を紹介した。特に音読アプリ Qulmee(East Education)を用いて行う事により学生の音読への取り組みが向上し、音読を自発的に行う学習者が増えたことを実証した。まとめとして、「スピーキング活動を行うためにはその前に音読活動を順序立てて行う必要がある」こと、「音読は教員が発音やプロソディーを確認するステップが必要である」こと、「スローラーナーのためにはいきなりアウトプットではなく様々な工夫が必要なこと」「学習は直線的にではなくスパイラルに進むこと」を挙げている。

研究協力者　岩崎美佳氏

[実践研究 1]スローラーナーに対する効果的な言語発信指導

実践前に以下のような疑問を提示した。１点目は「スローラーナーにとって英語によるコミュニケーション活動は本当に難しいのか」である。特に「課題の与え方」、「英語力以外の要因（発想力不足、経験不足、自信の欠如)」、「文字認識がしづらい生徒にとっての音声表現のしやすさ」の３点から検証する。２点目は「コミュニケーション活動は学習の成果としてしか機能しないのか」である。「言いたいことを言うために学ぶという動機づけとして機能しているのではないか」そして「コミュニケーション活動自体が練習・鍛錬の機会となっているのではないか」を検証することとした。以上を検証するためにアンケートを実施した。アンケートはスピーキングパートとライティングパートに分けられている。各技能が好きかどうか尋ねた後で、各技能における困難点を選択形式で尋ねている。更に生徒のアウトプットにおける困難点をアンケートにより明らかにした。これらの綿密な調査を基に知識不足や発想力不足を補うための実践がなされた。実践は定期的に問題点を振り返りながら 2018 年度と 2019 年度に実施された。

実践前に定めた命題に関して以下の結果を得た。

① スローラーナーにとって英語によるコミュニケーション活動は本当に難しいのか?

課題の与え方を工夫すれば、英語を苦手とする生徒でも可能である。むしろ、文字認識がしづらい生徒にとって音声表現による動機付けは有効である。ただし、帯活動で同じ活動を繰り返すとすぐ飽きてくるので、バリエーションと習熟段階に従って、活動内容の変更が必要である。

② コミュニケーション活動は「学習の成果」としてしか機能しないのか?

「言いたいことを言うために学ぶ」という動機づけとして機能していると言える。活動の適切な評価が、次の学び(向上)へのモチベーションになりうる。この実践報告にある実践以外にも様々な学力レベルのクラスでの実践が報告されている。授業内の音読やスピーチを音読アプリ Qulmee を使用し評価した実践に関しては岩崎(2020)にある。

研究協力者: 梶谷和司氏

[実践研究 1]　高校生のためのフォニックス指導～生徒が英単語を正しく読めて書けるようになるために

梶谷(2017)を発展させ、高校現場でのフォニックス指導を行った。まず小学校以来ローマ字読み・カタカナ発音で学習・暗記がなされていることを指摘し、フォニックスルールで再整理し、つづりを正しい発音と結びつけて覚え直すことで定着を促した上で、高校で学ぶ多音節語にも適用し、学習の負担軽減、効率化を図り、自立した学習者を育成することを目指した。特に日本語の２倍以上ある母音に着目し、基本的な母音を定着させるための指導法を提案した。本研究時においては特に語彙レベルを中学～高１レベルの単音節語に絞り、学習内容の整理・復習を強化・充実するとともに、プリントサイズを A4 よりもスローラーナーの視野に入りやすい B5 にした。また、アルファベットの識字に困難を持つ学習者にも読み易いフォント Sassoon を使用するなどの工夫を行った。教材としては英単語発音識別テストや自主教材ワークシートの開発を行った。成果としては、生徒の音声特に母音に対する意識の向上とともに、英単語中の母音の聞きとりと発音の弁別に学習効果が見られた。2020 年度にはオンラインでのフォニックス指導のための動画作成を行った。

研究協力者: 近藤泰城氏

[実践研究 1] 工業高校におけるスローラーナーに配慮した授業プロセス

近藤氏の三重県立桑名工業高等学校での 2019 年度の実践報告である。以下の４つについてスローラーナーが比較的多く習熟度の差が大きい実業高校での 1 つの授業形態を提案した。まず１つ目にスローラーナーも含め、生徒全員が小さいながらも達成感を感じられることを目指した。活動に小さな目標を定め達成感が感じられるようにした。２つ目に 習熟度の差、課題にかかる時間の差などを吸収する工夫をした。つまり習熟度の差を鑑みながら生徒が行う活動に差をつけた。3 つ目にタスクの難易度を調整して達成感を高める努力をした。 ４つ目は音読や書く作業を授業中に行い定着をはかる場面を多く設けた。これらの基本的な観点を基に授業モデルを提案した。特に有効な活動として音読とワードハントの組み合わせにより活動の前後でのリスニング力の向上と、音読・ペアワークの英文暗唱への効果がみられた。

[実践研究 2] 後置修飾の習得を目指すアニメーション教材

高校生のつまずきの大きな原因の一つである後置修飾に関して口頭練習によるのではなく、日本語で説明するアニメーション教材を作成した。方法としてはまず名詞＋修飾句・節を作成し、その後その塊を文の中に挿入した。後置修飾は一例であるが、様々な項目に関してアニメーション教材を作成した。反転授業における使用を視野に入れている。白畑・中川（他）(2020)にはアニメーション教材の作成方法やその他の例について近藤氏による解説が詳細に述べられている。

研究協力者: 松田裕史氏

[実践研究 1] 音読中心の４技能統合型指導におけるスローラーナー指導

松田氏の実践は年度毎に述べる。安木は定期的に松田氏の所属する学校を訪問し助言を行なった。2018 年度の実践ではコミュニケーション英語Ⅲの授業での実践を行った。「本文を複数回読ませる活動を授業に取り入れ、アウトプット活動をゴールとした音読活動を行い、リテリングを取り入れることで RE（Reading Efficiency）やスピーキングの Fluency を高めることができるかどうか」を検証した。授業は以下の順番で行われた。「 1.本文理解 2. アウトプット活動をゴールとしたフレーズ音読 3.リテリング 4. RE を２か月ごとに１回測定する。5. 1- min monologue をレッスンごとに行う」。結果 RE は継続的に向上した。Fluency に関しても伸びは見られた。

2019 年度はコミュニケーション英語Ⅱの授業で実践研究が行われた。事前アンケートとして音読指導に関するアンケートを実施した。仮説として「1.本文を複数回聞かせる活動を通して内容理解を図る。それによりリスニング力を上げることができる。2.アウトプット活動をゴールとしたフレーズ音読活動を行うことによって RE を上げることができる。また、スピーキングの Fluency を高めることができる」を設定した。授業は安木(2017)を基本に以下の順序で実施された。「1.Oral Introduction や生徒間のやり取り 2.新出単語・イディオムの確認　3.リスニングによる本文理解 4.リーディングによる本文理解　5.音読活動 6.リテリング）7.アウトプット活動（ディスカッション、マイクロディベート⇒ライティング)」結果 RE 並びに校外模試のリスニング結果に顕著な向上が見られた。2020 年度の発表ではスローラーナー指導とともに松田氏が行って来た「深い学び」に関する発表も行った(松田,2020)。

研究協力者: 村木美奈子氏

[実践研究 1]　英語表現授業におけるスローラーナー指導の工夫

『英語表現』の授業における実践研究である。誰もがスローラーナーになり得るという視点に立ち、「1.科目の指導目標 2.4 技能統合　3.音読 4.教員負担感の少ない準備(教科書・デジタル教材の活用、授業プリントを作らない)　5.暗唱例文を使った自己表現」という 5 つの基本方針をふまえたユニバーサルデザインを意図した授業実践を報告した。新学習指導要領の『論理・表現』の文言の中にある「英語を話したり書いたりすることによる発信力を高めることを目指す科目である」を受け、文法項目を含む暗唱例文を徹底的に活用する実践を行なった。村木(2020)に詳しい。更に村木(2019)を参考に 2021 年１月には「内容を深く読み取れないつまずきにどのように対処するか発問について考える」のタイトルで内容理解上のつまずきに関する研究発表を行った。

研究協力者: 渡部正実氏

[実践研究 1]　高校定時制におけるスローラーナーに対するマルチメディアを用いた語彙・文法指導

研究実践校は、在籍生徒の過半数が外国籍生徒であった。入学する外国籍生徒の日本語力は口頭での意思疎通はなんとか可能だが、学習言語としての日本語の能力はばらつきがあった。日本語による読み書き、口頭でのコミュニケーション能力が求められ、「日本語習得の機会を確保する」必要性があった。このため、実践においても日本語を使用した英語学習が行われた。具体的には１・２年生のコミュニケーション英語Ｉで、『1.新出単語の意味確認を日本語で行い、2.サイトトランスレーションシートを使い、日英どちらも音読をし、3.基本的な項目の確認をするための「まとめプリント」を自学・教え合いで確認させる。』実践を行なった。基本方針としては「授業外の学習時間・機会の確保」「多様性への対応・個別学習への対応」「反復練習の取り組み」「評価・フィードバックシステムの効率化」「教材作成の効率化特に ICT の活用」があげられた。

手法としては.ハンドアウト作成における工夫（サイズ、行番号、フォント)、文法指導における意味順指導や記号付けの方法、ICT 機器の使用（iPad やプロジェクターの基本的な使用法に加えて、Kahoot!や Quizlet 等のアプリの使用法、GoodNotes による板書などが紹介された。

5. 終わりに

本研究の目標である、「スローラーナーを指導する方法」と「スローラーナーのための教材開発」は一定のレベルで達成できた。また現場への発信も３回の講演会実施と研究内容を映像で報告する DVD 作成を通して達成された。研究成果が各地で奮闘する英語教師の指導法や教材に改善、そして英語学習に苦しむスローラーナーが少しでも英語の楽しさに気づき学力を向上させることの一助となれば幸いである。

主要参考文献

岩崎美佳(2020).「自発的学習のきっかけづくり―音読トレーナーQulmee の活用例」『英語教育 2020 年 11 月号』.大修館書店,70-71.

梶谷和司(2017).「高校におけるフォニックス指導の実証的研究～生徒はフォニックスで英単語を正しく発音して書けるようになるのか～」京都外国語大学大学院修士論文

金谷憲(編著)(2017).『高校生は中学英語を使いこなせるか?』アルク

白畑知彦・中川右也（編)(2020).『英語のしくみと教え方 ―こころ・ことば・学びの理論をもとにして』

鈴木寿一・門田修平　(編）(2012).『英語音読指導 ハンドブック』 大修館書店

田地野彰(2011).『〈意味順〉英作文のすすめ』岩波書店

手島良(2004).『英語の発音・ルールブックーつづりで身につく 発音のコツー』日本放送協会

西巖弘(2010).『ワードカウンターを活用した驚異のスピーキング活動 22』明治図書

松田裕史(2020).「高校英語における『深い学び』の実践」『第 69 回読売教育賞最優秀受賞者実践報告論集』,122-136.

村上加代子(2018).『読み書きが苦手な子どものための英単語指導ワーク』明治図書

村木美奈子(2019).「生徒による発問作成が読みの姿勢に及ぼす影響に関する実証的研究」京都外国語大学大学院修士論文

村木美奈子(2020). 「生徒も教師も楽しめるアウトプット活動　暗証例文を使った自己表現」『英語教育 2021 年 3 月号』大修館書店, 18-19.

安木真一(2010).『英語力がぐんぐん身につく!驚異の音読指導法 54』明治図書出版株式会社

安木真一(2014). 『英語力がぐんぐん身につく!驚異の英単語指導法 40』明治図書出版株式会社

安木真一(2016). 「英語学習者の文法上のつまずきを減らすための提案―中学校英語教科書基本文テストの分析から考える」『中国地区英語教育学会紀要』46,79-87 頁

安木真一(2017). 「工業高等専門学校における音読中心の 4 技能統合型指導の実践―スローラーナーへの指導に

安木真一（編）(2020). ＤＶＤ　高校英語・スローラーナー支援のための実践的指導法と教材開発～「つまずき」を克服するための授業と教材について～

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計6件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 安木真一	４．巻 8月号
２．論文標題 スローラーナーに配慮したオンライン英語授業の取り組み	５．発行年 2020年
３．雑誌名 英語教育（大修館書店）	６．最初と最後の頁 20-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 安木真一	４．巻 Vol.72.2
２．論文標題 Retellを利用した音読指導	５．発行年 2020年
３．雑誌名 英語教育（開隆堂）	６．最初と最後の頁 4-5
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 安木真一	４．巻 3月号
２．論文標題 学習者がつまずきやすい６つのポイントとその指導法	５．発行年 2021年
３．雑誌名 英語教育（大修館書店）	６．最初と最後の頁 10-11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 安木真一	４．巻 Vol68 No.7
２．論文標題 英語の音声の仕組みと英文法に関する推薦書	５．発行年 2019年
３．雑誌名 英語教育（大修館書店）	６．最初と最後の頁 36-37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 安木真一	4．巻 49
2．論文標題 音読中心の英語指導法を振り返る ― 達成できたこととできなかったこと ―	5．発行年 2019年
3．雑誌名 中国地区英語教育学会研究紀要	6．最初と最後の頁 97- 106
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 ―

1．著者名 安木真一	4．巻 12
2．論文標題 生徒が効果を実感できる10の音読テクニック	5．発行年 2017年
3．雑誌名 英語教育（大修館書店）	6．最初と最後の頁 22 23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 ―

〔学会発表〕　計17件（うち招待講演　5件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 安木真一
2．発表標題 効果的な音読指導を考える
3．学会等名 英語授業研究学会第278回例会（オンライン授業実践研究）（招待講演）
4．発表年 2020年

1．発表者名 安木真一
2．発表標題 文法指導上のつまずきにどのように対応するか？
3．学会等名 高校英語におけるスローラーナーを支援するための実践的英語指導法と教材開発に関する研究」に関する社会貢献講演会(1日目)
4．発表年 2021年

１．発表者名 安木真一
２．発表標題 文字と音声の一致のつまずきに関してどのように対処するか？
３．学会等名 高校英語におけるスローラーナーを支援するための実践的英語指導法と教材開発に関する研究」に関する社会貢献講演会(１日目)
４．発表年 2021年

１．発表者名 安木真一
２．発表標題 音読を表現活動につなげることができないつまずきにどのように対処するか？
３．学会等名 高校英語におけるスローラーナーを支援するための実践的英語指導法と教材開発に関する研究」に関する社会貢献講演会(2日目)
４．発表年 2021年

１．発表者名 安木真一
２．発表標題 ４技能５領域をバランスよく伸ばす音読中心英語指導法
３．学会等名 愛知県高等学校英語教育研究会（招待講演）
４．発表年 2020年

１．発表者名 安木真一
２．発表標題 音声と文法上のつまずきを克服するための１０の指導法の提案
３．学会等名 「高校英語におけるスローラーナーを支援するための実践的英語指導法と教材開発に関する研究」に関する最終発表会（安木真一代表科研発表会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 安木真一
２．発表標題 高校英語におけるスローラーナーを支援するための実践的英語指導法と教材開発に関する研究（コーディネーター）
３．学会等名 「高校英語におけるスローラーナーを支援するための実践的英語指導法と教材開発に関する研究」に関する最終発表会（安木真一代表科研発表会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 安木真一
２．発表標題 ４技能５領域をバランスよく伸ばす音読中心英語指導法
３．学会等名 和歌山県高等学校英語教育研究会（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 安木真一
２．発表標題 音読を授業とリンクした自主学習において促進させる手法の考察
３．学会等名 全国英語教育学会弘前研究大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 鈴木寿一・戸田行彦・安木真一
２．発表標題 適切な英語指導と不適切な英語指導 ― 日本人学習者の英語力の向上と次の若い世代のための英語教育を成功させるために―高校教員としての実践と指導助言者としての立場から
３．学会等名 外国語教育メディア学会　第58回　全国研究大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 安木真一
２．発表標題 英語で授業を行うための基礎と方法論
３．学会等名 第4ブロックグローバル高専事業 英語で授業を行う教員キャンプ講師（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 安木真一
２．発表標題 高校英語におけるスローラーナーを支援するための実践的英語指導法と教材開発に関する研究
３．学会等名 全国英語教育学会京都研究大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 安木真一
２．発表標題 音読指導によるバランスのとれた英語力育成の理論と実践
３．学会等名 全国英語教育学会京都研究大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 安木真一(コーディネーター）・岩崎美佳・梶谷和司・近藤泰城・松田裕史・渡部正実
２．発表標題 高校英語におけるスローラーナーを支援するための 実践的英語指導法と教材開発に関する研究
３．学会等名 「高校英語におけるスローラーナーを支援するための 実践的英語指導法と教材開発に関する研究」に関する中間発表会（科研発表会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 安木真一
２．発表標題 スピーキングにつなげる音読指導
３．学会等名 京都教育大学　英語の教え方研究会 京都外国語大学　より良い英語教育を考える会共催
４．発表年 2019年

１．発表者名 安木真一
２．発表標題 音読指導を核にした４技能統合型指導法の考察 ―中・高・大での実践で達成できたこと
３．学会等名 全国英語教育学会島根研究大会
４．発表年 2017年

１．発表者名 安木真一
２．発表標題 アクティブラーニングを用いた授業（学会公開授業指導助言）
３．学会等名 日本協同教育学会第１４回大会プレ大会（招待講演）
４．発表年 2017年

〔図書〕　計4件

１．著者名 安木真一・岩崎美佳・梶谷和司・近藤泰城・松田裕史・村木美奈子・渡部正実	４．発行年 2020年
２．出版社 ジャパンライム	５．総ページ数 DVDのためなし
３．書名 DVD高校英語・スローラーナー支援のための実践的指導法と教材開発 ～「つまずき」を克服するための授業と教材について～	

１．著者名 監修･解説：安木 真一	４．発行年 2019年
２．出版社 ジャパンライム	５．総ページ数 DVDのためなし
３．書名 DVD京都外国語大学大学院・理論＆実践英語指導法シリーズ ラウンド制を活用した授業実践 授業者：竹下厚志	

１．著者名 監修･解説：安木 真一	４．発行年 2019年
２．出版社 ジャパンライム	５．総ページ数 DVDのためなし
３．書名 DVD 京都外国語大学大学院・理論＆実践英語指導法シリーズ 教科書を徹底活用した指導 授業者：戸田 行彦	

１．著者名 安木真一（授業・解説）	４．発行年 2018年
２．出版社 ジャパンライム	５．総ページ数 DVDのためなし
３．書名 （DVD）京都外国語大学理論実践シリーズ 「英語力がメキメキUP!」４８の音読・シャドーイング	

〔産業財産権〕

〔その他〕

本研究における実践で使用した音読アプリQulmee2.0、Qulmee2.5 (East Education)を監修者として開発協力を行った。

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	岩崎　美佳 (Iwasaki Mika)		
研究協力者	梶谷　和司 (Kajitani Kazushi)		
研究協力者	近藤　泰城 (Kondo Yasuki)		
研究協力者	松田　裕史 (Matsuda Yuji)		
研究協力者	村木　美奈子 (Muraki Minako)		
研究協力者	渡部　正実 (Watanabe Masami)		

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関